

源氏物語の「いとどし」について

末 弘 忠 節

I はじめに

一 私の疑問

辞書によると「いとどし」は次のように説明されている。

『いとど (副) (ト) ますます、いよいよ、いっそうの (ト) そうでなくでさえ、ただでさえ。——し (形シク) (ト) いっそうの (ト) そうでなくでさえ、そのような。——しく (副) (ト) ますます (ト) そうでなくでさえ、ただでさえ』 (三省堂明解古語) 『いとど (副) ① 一層、いよいよ、ひとしお ② もとより、ただでさえ。いとどし (シク) さらにはなはだしい、いよいよ激しい』 (角川古語) 『いとど (副) 彌、甚シク、イヨヨ、マスマス。いとどし (形) (ハ) 前條ノ語ヲ活用ス (あはれ。あはれし) (ト) イヨイヨ甚ダシ』 (大言海)

このように「いとどし」は「いとど」から派生し、意味内容はほとんど同じであるように見える。はたしてどうであろうか。

二 「……し」について

「いとどし」は源氏物語に三三例見られ、内「いとどしき」一七例、「いとどしく」一五例、「いとどしかる」一例で「いとどし」の形は出てこない。源氏とはほぼ同時代あるいは前時代の作品でも

次の和歌に使用された二例を認める程度で、「いとどし」の形も今のところ見つけえない。

1、玉すだれうちとかくるはいとどしくかけを見せじとおもふなり

けり

2、いとどしく過ぎゆく方の恋ひしきにうら山しくもかへる浪かな

(伊勢七段)

さてこういったことから副詞「いとど」のあとに「し」が結合した合成形容詞の一つと考えるのは容易である。(……しく・しき・しかるの三つの形から形容詞型活用の「いとどし」を想定する。) 他に副詞+「し」の形容詞として「殊更し・未だし・甚だし」などがある。

この接尾された「し」の活用形はただ語調をととのえるぐらいの働きしかないものであろうか。形容詞の語尾「し」については諸説がある。「し」は詞か辞かについては次の両説が代表する。

時枝誠記説……「し」は他の接尾語と同様に一語の機能において他の語と結合するものと考えるのが至当で、きわめて抽象的な状態的屬性概念を表わして詞に属する。(注1)

水野賢説……形容詞は詞の部分と辞の部分とに分割すべきであり、前者は体言、後者は助動詞(指定の)として扱うべきではないか。(注2)

また村内英一氏は形容詞の意味的区別にふれて次のように述べている。『ク活用「長し・高し」……客観的性質・状態的屬性概念をあらわす。シク活用「悲し・楽し」……主観的感情感覚をあらわす。シク活用における「し」という音節部分が意味上の差異となんらかの関連をもつものではないかと考えられている。これに關しては上古の語例について検討し、「し」は情意的な要素をあらわしているとした山本俊英氏の考察がある。』(注3)

三 私の仮説

以上のことから、「いとど」に情意を表わす語「し」が加わって一つの用言となつたと推定することは無理ではあるまい。

ここで「し」のもつ意味をきわだたせるために、本来の形容詞が語幹を省略して語尾「し」が残つたと仮定するとどうか。この仮定を図式化すると△いとど+詞の図式しき、例えば△いとど

△し▽のつづまつたものとして「いとどし」を考へるのである。ひりりたちたる御ためにかゝるしもこそ心とまらぬもよほしならぬ女君たちなに心ちしてすくし給らむよの女しくなよひたるかたはとをくやとおしはからるる御ありさまなり(橋姫一五八べージ) これは宇治の入宮の様を薫が思いやるどころだが、文中の「女しく」という形に注目したい。参考までに佐伯梅友氏の解説を引用しておきたい。「『世の常の女しく』というように続けて『女しく』という語がまだ形容詞になり切らないということ考へたこともあつたが『世の常の』は『女しくなよびたる方』にかかると

考へるほうが穏やかだろうと今は考へている。』(注4)しかし形容詞の語幹の省略がかんたんに行なわれるはずはない。だが、感情が高潮する陳述においては用言の省略は珍らしいことではない。

以上の考へにもとづき「いとど□□し」の□□内にはいる形容詞語幹を推測して「いとどし」の意味内容を考察したい。

Ⅰ 「いとど」について

一 はじめに

源氏には副詞「いとど」が二六三ほど出てくる。(対校源氏物語新釈の本文による。)その被修飾語を検討してみると動詞一四五(複合動詞は一語とみた。)、形容詞一〇〇、形容動詞一五が主なもので、その他として次の三を得ている。

1、「あはれなりし折からもいとどなむ」……(蜻蛉)

2、「いとどなよなよと……」(桐壺)

3、「いとど、八歌ニ私ハVしほたることをやくにて松島に年ふるあまもなげきをぞつむハトアルV(須磨)

用例2はただ一つの副詞の場合である。用例1・3は述語が省略されており注目すべき文型と思はれる。

なお形容動詞は、終止形は「あはれなり・美しげなり」の二例のみで、他は「あはれに」四例「清らに」二例「をこに・らうたげに・あてに・あやにくに・いやめに・悲しげに」各一例と連用形「に」である。そのほか「あはれ」の形が一つある。一般に形容動詞は「なり」を含むために客観的性質が多いと考へられていることに注意したい。このことは後述する。次に、動詞と形容詞についてと

くに著るしい点を考察したい。

二 被修飾語が動詞のとき

頻度の多いものからあげると「まさる」一六「おぼゆ」一〇「添ゆ(思ひ添ふヲ含ム)」八「思し(ひヲ含ム)知る・つぶる・思ひ乱る」四「思ひ出づ・思す」三「見る・心地す・かきくらす・心づくす・まどふ・思し沈む・思ふ・加はる・ながむ・見ゆ・推し置るせきもあへず」各二である。ここで注目すべきは「思ふ(思すヲ含ム)」とその複合語は全部で二四あり、「覺ゆ」一〇と合わせて約四分の一を占めることである。他の語をも考えあわせて、主観を強く提示する語がきわめて多いことに気づく。

三 被修飾語が形容詞のとき

一〇〇例のうち頻度の多いものは「なし」一四「つつまし」四「恥づかし・深し・うとまし・うしろめたし・苦し」三「露けし・悲し・ありがたし・めでたし・やまし・いぶかし・をかし・おぼつかなし・け遠し・わびし・心細し」各二である。

形容詞は客観的状态を表わす語と主観的感情情趣を表わす語と大きく分けられる。もちろん使用箇所によって解釈の差があり、つねにはっきりとは分類できないが、ある程度の区別はなしうるのである。前述の村内氏の説をかりて一応前者をク活用のもの、後者をシク活用ものとする。使用された七二の形容詞のうちク活用は四一、シク活用は三二である。ところでク活用ものでも「露けし」は登場人物あるいは作者の主観的判定のことばとして使われ、「け遠し」も二例とも「ハ心が√け遠し」となっている。前に列挙したうち他のク活用の語はいずれも主情を表わしている。また特別な形容詞といえる「なし」の使われかたをみると、「あかぬ所なし・静

心なし」二「なからむ・身のおき所なし・並びなし・所なし・いなび所なし・人なし・方なし・限なし・いとまなし・常なし」一となる。このうち傍線のは主情性が強いといわねばならない。また他の「弱し」なども「いとど心弱からむ人は」(朝顔)の形で出てくるのである。とすると、すべてのク活用のうち客観的状态をいう語とはっきり認めるのは「なし」中の五例と「近し・多かり・暑し・細し」を加えたわずか九例となる。

シク活用では「久し・委し」の二語のみがどちらともとれる。「見たてまつらん事もいとど久しかるべきぞ」(賢木)「いとど委しきハ注意√心しらひ添ふも」(若菜下)の使われ方をみると、後者は心情を示すといえるが、前者は期間をさすので客観的判断とせざるをえない。

以上、形容詞については一〇〇例中一〇例を除いて主情性の強い語が「いとど」と結びつくことになる。

四 まとめ

「いとど」は広くさまざまな場合に用言を修飾して現われるが、以上のように主観的感情情趣を表わす語と強く結びつくことがわかる。

前述した形容動詞も一五例のうち連用形「〜に」が一二例を占めたのも客観的性質を示すという「なり」をきらうゆえとも考えられるのである。

ところで「いとど」の被修飾語である動詞と形容詞の数を比較すると約1.4対1の割合で形容詞がきわめて多いといえる。参考までに桐壺の巻での使用数を見ると動詞(複合動詞は一語とした。)八四一、形容詞一六〇で約5.2対1の比率である。このことは「いと

ど」と形容詞の結びつきが強いことを示しているといえよう。

■ 「いとどし」について

一 はじめに

「いとどし」に主情性の強い用言が内在することを考慮して、以下「いとどしき」と「いとどしかる」さらに「いとどしく」と分け、源氏に見られる余用例の意味内容を考察したい。引用文は池田博士の源氏物語大成校異篇の本文によっている。

二 「いとどしき」の場合

被修飾語に抽象的な語の多いことがめだつが、なかでも「心」とその類似語が六一六例中六を占める。

(1) 入帝ハ藤ガVめつらしうあはれにていとゞしき御おもひのほとかきりなし(若紫一七六ページ) 藤壺は源氏との密会と妊娠のうしろめたさに苦しみながら帝にまみえる。異常な藤壺なるがゆえに帝の思はいやます。そこにある不安さを強く感ずる「いとど烈しき御思ひ」なのである。

(2) にはかに入才産ノV御けしきありてなやみ給へはいとゞしき御いのりのかすをつくしてせさせ給へれと(葵一九七ページ) 葵が御息所の怪におびやかされながら出産する異常さが場全体をおおっている。そういう不安な気をはらんだ「前ヨリイツソウ甚ダシイ重大ナ折リ」(岩波版日本古典文学大系本の訳による)なのである。

(3) 入玉ノVはかなけにきこえない給へるさまけにいとゞしき御心わかやかなりこさらしかはとうちすし給ひていとゞしき御心はくるしきまでなをえしのひはつましうおほさる(常夏八三六ページ) 夕顔の娘玉かづらへの恋に苦しむ源氏の様子をいうので「なつかしう

若やか」な玉かづらに対してひとしおつる「いとほしき御心」なのである。

(4) 入源ノVときのいうそくとあめのしたをなひかし給へるさまことなめれば大将のみ心をうたかひ侍らざりつるなどの給ふに宮はいとゞしき御心なれはいとものしき御けしきにて(賢木三七八ページ) 弘徽殿は父右大臣よりも「イツソウ烈しき」御心だからたいへん腹立たしい気色になるのである。

(5) 一夜のほとあしたのまもこひしくおほつかなくいとゞしき御心さしのまさるをなとかくおほゆらんとゆゞしきまでなむ(若菜上一〇六六ページ) 源氏の紫の上に対する愛情がきわめて強いことをいうのだが「いとど恋しく苦しき御志」となるところを「恋しく覺束なく」が先行して現われており「ゆゆしき」気持は源氏のみならず作者の構想のなかの不安感として「いとどしき」に内包されているとみたい。

(6) さてうちしめりおもやせ給へらむ御さまのおもかけにみたてまつる心地して思ひやられ給へはけにあくかるらむたまやゆきかよふらむなといとゞしき心地もみたるれはいまさらにこの御ことよかけてもきこえし(柏木二二三ページ) 小侍従に女三宮が世間体を恥おていると聞いた柏木が「一段ト甚ダシイ悲恋ノ氣持モ乱レ悩ム」(岩波版古典大系訳)なのである。たんなる恋情でなくて、罪悪感からくる不安怖れをまじえた「いとど苦しき」心地なのである。

(7) かかるほとにすみ給ふ宮やけにけりいとゞしきよにあさましうあへなくてうつろひすみ給ふへき所のよろしきもなかりければうちといふところによしある山さともたまへりけるにわたり給ふ(橋姫一五一三ページ) 入宮の不幸な様を述べたところだが、「いとど苦

しき世」と解することは自然である。八宮は失意の中で没するのである。

(8) かかる事たえずはいとよしき世にうき名さへもりいてなむおほきさきのあるましきことにの給ふなるくらゐをもさりなんとやうくおほしなる(賢木三五四ページ) 藤壺が春宮や源氏の心を思つて苦しみ、いっそのこと中宮の位をも退こうと思うのである。「いとど苦しき世」なのである。

(9) 八薫ハ大君ヲいとははれと思てかはかりの御けはひをなくさめにてあかし侍らむゆめくときこえてうちまともますいとよしき水のをとにめもさめてよはのあらしに山とりの心ちしてあかしかね給(総角一六一八ページ) 大君と薫のわりきれない煩悶の姿をえがいている。「いとど悲しき水の音」で悲しい心に聞えている水音なのである。

(10) 八月廿日のほとなりけりおほかたの空のけしきもいとよしきころ君たちはあさゆふきりのはるまもなくおほしなけきつつかめ給(椎本一五六ページ) 八宮の病を嘆いているところで、このあとすぐ八宮の死が告げられるのである。「いとど物哀しき頃」で嘆きの心ですべてが見られるのである。

(11) 内よりも院よりも御とふらひしはくきこえつみしきくおほしもおほしめしたるにもいとよしきおやたちの御心のみまどふ(若菜下一二二〇ページ) 柏木の病に各方面から見舞いが集まる。それにつけても「いとど悲しき親達の御心」なのである。

(12) 八女五宮ハVときく八源ヲVみたてまつらはいとよしきいのちやのひはへらむけふはおいもわすれうき世のなけきみなさりぬる心ちなむとてもまたないたまふ(朝顔六四一ページ) 源氏の叔母であ

る女五宮は無常な世にかえて長命であることをうらめしく思つている。「残リスクナイ命」(対校源氏物語新釈の訳) ととるより「いとど苦しき余命」と考えたい。

(13) みちいと露けきにいとよしき朝きりにいつこともなくまどふ心地し給ふ(夕顔一三四ページ) 夕顔の火葬ののち帰る源氏の心をいうので「露けき」ものは路であるとともに源氏の涙にくれる心でもある。その悲しみを強く押し出した叙述で、このあと源氏は病に伏すのである。「いとど悲しき思いの朝霧」である。

(14) うちしめりたる八螢ノV宮の御けはひもいとえむなりうちよりのめくおひかせもいとよしき御にほひのたちそひたれはいとふかくかをりみちてかねておほししよりもおかしき御けはひを心とよめたまひけり(螢八〇七ページ) これまでの用例とちがい悲哀感を伴なわぬ場合である。源氏の衣の匂ひをいうのである。前の部分に源氏が空薫物を心にくいほどに匂わしていることが述べてあり、ここは「いとどとうるわしき源氏の御衣の匂ひ」である。

(15) あるしのおとよしきちかまさりをうつくしき物におほしていみしうもてかしつききこえ給ふ(藤裏葉一〇〇六ページ) 夕霧のすばらしさを述べているので「いとど美しき近まさり」ととる。対校源氏の訳にも「近クテ見ルトナホサラ美シイノデ」とある。(14)と同じ使い方である。

(16) なを万さいくときかきをとるかへしつゝいはひきこゆる八源ノV御世のすゑおもひやるそいとよしきや(若菜下一一四〇ページ)

他に類を見ない用例である。ここは源氏と繁上の住吉杜参詣のところである。「いとどめでたきや」と素直にとれるのだが、この

ち紫上は物怪に悩み、源氏に不幸が訪れてくる。やがて来る運命の不吉な予感が示されているのはあるまいか。「いとどゆゆしきや」ととりたいたいところである。

三 「いとどしかる」の場合

①八源ハVわか身かくてはかなきよをわかれなは八紫ガVいかなるさまにさすらへたまはむとうしろめたくなしけれと八紫ノVおほしりりたるかいとVしかるへければ……(須磨四二二ページ) 有名な源氏と紫上の別れの場面だが、ここは「思し入りたる悲嘆がいとど烈しかるべければ」と解することができる。

四 「いとどしく」の場合

全一五例を以下述べるごとく五種類に分けて考えていきたい。

①悲愁の叙述と結びついている「いとどしく」

②八私ハVかかるきすさへつきぬれはいよくましらひをすへきにもあらず八アナタガVはつかしめ給めるつかさくらゐいとVしくなによつてかは人めかん世をそむきぬへき身なめり(帯木五〇ページ) 馬頭が烈しい絶望におちいったという思いを語るくだりである。「いとど苦しく」ととつてよいと考える。

③八源ハV……この女宮の御事き、給ひてもしさるやうもやとおほしあはせたまふにいとVしくいみしき事のはつくしきこえ給へと(若紫一七六ページ) 藤壺懐妊をきいて源氏は何とか会いたいと命婦を責めたてるのである。源氏の不安と怖れの中の「いとど悲しく」である。

④……みたり心ちのみうこきてなむきこえさせむも中Vに侍へければそなたにもまいり侍らぬとあれはいとVしく宮はめもみえ給はずしつみいりて御返りもきこえ給はず(葵三一四ページ) 葵上の死に

より悲嘆にくれる源氏の態度に強くうたれ、いっそうの悲しみにくられる母大宮の様子である。「いとど悲しく」である。

⑤……たたふりにふりおちてえとよめ給はずつきせぬ御ことよもをきこえかはし給一条の宮にまてたりつるありさまなと八致仕大臣ニVきこえ給八ソレヲ聞イテVいとVしう春さめかとみゆるまてのきのしづくにことならすぬらしそへ給(柏木二二六〇ページ) 柏木の死を忘れかねて父の大臣がひどく嘆くのである。「いとど悲しう」である。

⑥花もみち水のなかれにも八入宮ハV心をやるたよりによせていとVしくなめ給ふよりほかのことなし(橋姫一五一三ページ) 北方におかれて老いさらばえている我が身を嘆くのである。「いとど悲しく」眺めたもうのである。

⑦八薫ハ大君トノ縁ガVいとVむかしとをくなる心ちしてすするに心ほそければ九月廿日ばかりに八宇治ニVおほしけりいとVしく風のみふきはらひて心すこくあらましかる水のをとのみやととりにて人かけもことにもみえず(宿木一七五八ページ) ここは悲しみにくれる薫の心を強く浮き出している。「いとどしく」はたんなる修飾語ではなく「いとど悲しく」思う薫の目が「人影も殊に見」ないのである。

⑧和歌中に使われている「いとどしく」

⑨すむしのごゑのかきりをつくしてもななき夜あかすふるなみた哉えものりやらすいとVしく虫のねしけきあさちふに露をきそふる雲のうへ人かこともきこえつへくなんといはせ給ふ(桐壺一五一ページ) よく知られた部分で、歌中の「いとどしく」がどの語にかかるといふことで問題になる個所だが、これを「いとど悲しく」と

解すると歌意は「娘ノ死ヲ悲シンデスツカリ沈ンデイル宿ナノニ虫ノ音ガシゲク、カテテ加エテ貴女ガ悲シミノ涙ヲ増シテ下サル」となる。先の歌とのかけあいも自然であり、またかごと（恨み言）としての歌意がはつきりすると考える。

④秋きりのはれぬ雲のいと、しくこのよをかりといひしらすらむ（稚本一五七〇ページ） 八宮の死を悲しむ姫たちに強く同情している薫の歌で、「いとどしく」はたんに「甚ダシイ」の意ではなく、姫たちの悲しみを強く代弁する「いとど悲しく」ととるべきである。

◎「いとどしく」+心情を表わす語

⑤八中君ハVいともおほしたるけしきにてこのわたりにこそほめき給つれとかたり給へハ八中君ハVいと、しくかなしきそひてうせ給てのちいかて夢にもみたてまつらむとおもふをさらにこそみたてまつらねとてふた所なからいみしうなき給（総角一六四九ページ） 病の身上と父亡きあとのあわれな境遇に父をしのび悲嘆にくれているのである。悲しみの程度がより強くなって「いとど烈しく悲しさ添ひて」となる。

⑥しのひかたき八中君ノV御けしきなるを人なみ、くにもてなしてれいの人めきたるすまひならはかうやうに八中宮ハVもてなし給ふましきをなとあね宮はいと、しくあはれとみたてまつり給ふ（総角一六四一ページ） 八中宮の疎遠により悲嘆にくれる中君を姉の大君はかわいそうに思う。中君を「いとど悲しくあはれと」見るのである。

⑦八中君北方ハVむねつふれて少将をめやすき程とおもひける心もくちおしくけにことなる事なかるへかりけりと思ていと、しくあなわ

つらはしく思ひなりぬ（東屋一八二二ページ） 少将に対する期待が大きかっただけに失望が大きく、「いとど口惜しく」軽蔑する気になるのである。この感情の高まりが先行して「心も口惜しく」と現われていると思う。

⑧八中君北方ノ生前ニハVおり、くにつけたる花もみちの色をまかをもおなし心にみはやし給ひしにこそなくさむこともおほかりけいと、しくさひしくよりつかむかたなきま、くみ仏の御かざりはかりをわさとせさせ給てあけれおこなひ給（橋姫一五〇九ページ） 北方を失った後の八宮の淋しい生活ぶりがあるので、「いとど悲しく淋しく」である。

◎美の叙述と結びついている「いとどしく」

⑨八中君ニ庄倒サレタ御息所ハV涙のこほるを人のみるもはしたなけれどめもあやなる八中源ノV御さまかたのいと、しくいてはへをみさらましかは八中見テヨカッタVとおほさる（葵二八八ページ） 「いとどしく」は「いとど美しう」ととることも自然だが、御息所の感情の高まりを考えるとここは倒置とみて「見ざらましかばいとど口惜し」としたい。

⑩風す、しくおほかたの空おかしき比なるに八中宮ハVいまめかしきにすすみ給へる御こゝろなれはいと、しくえんなるにもおもはしき八中君ノV御心のうちはよろつにしのひかたき事のみそ多かりける（宿木一七二八ページ） 新婚のこととて、はで好みの八中宮に強い不安がつきまよって苦しむ中君の気持である。「いとど苦しう」と考えられる。「いとどしく」は「艶なるに」にかかるとはでない。

⑪わたり給とてつねよりことにうちけさうし給ひてさくら御なを

しにえならぬ御そひきかさねてたきしめさうそき給ひてまかり申し給へ源ノVさまくまなきゆうひにいとしくきよらにみえ給ふ女君ハ禁Vたゝならすみたてまつりをくり給ふ(薄雲六一一ページ)

源氏があまりにも美々しい姿で明石上の所にかようことに對して、紫上は内心おだやかでない。そういった苦しみ不安さとともに源氏を「いとど美しく清らかに」見るのである。

④その他の「いとどしく」

④……なとけしきはみをきてへ藏人少将ハVいて給ひぬいとしく心よからぬへ落葉宮ノV御けしきへ夕霧ハVあくかれまとひたまふほと大殿の君はひころふるまゝにおほしなげく事しけし(夕霧一三七四ページ) 落葉宮はわずらい多い身につけても亡き母御息所をしのんで悲しむのである。四人の登場人物が交錯するのでかなりまぎらわしく、「いとどしく」がかかる語を捜すとすれば三通りほど考えられる。しかしこの文の前は落葉宮の苦悩を述べることだりであることから「いとどしく」を落葉宮の心情と解したのである。「いとど悲しく心よからぬ」ととる。

II おわりに

前章の文例で想定した用言は、いわば代表的な形容詞であり、さらに敵密に文脈に照らせばより適切な語をえらび得るだろう。しかしこの小論の目的は全用例からうかがえる「いとどし」の特徴を知るのであるので以上のごとくとした。

- さて「いとどし」に内在する想定した用言をみると、④「苦し・悲し」系三四 ⑤「烈し・甚だし」系五 ⑥「うるわし・美し」系三 ⑦「ゆゆし」系一である。⑦について五例のうち、不安を伴うもの

二、悲しみを伴うもの二である。(4)は例外的とも思われ「イツソウ烈シキ御心」ということばに作者のある特別な感情があると思うのだが決め手を見つけない。⑥については「ゆゆし」といった感情とつながる美として考えられないだろうか。

以上結論として、「いとどし」は多くの場合悲哀あるいは不安な感情を強く内在させる用言として登場し、たんなる副詞性修飾語としておらず、「イツソウ甚ダシイ」といった解釈では皮相にすぎたものであると考える。

なお北山谿太氏に「いとどし」について次説がある(注5)。現代の我々が連用修飾語の形でいうところを、連体修飾語の形にして下の体言にかけていう特殊な語法が源氏にあると述べて、「いとどしき」を「いとどしく」の意に解すると「一層」という詠語がしっくりする。したがって「いとどしき」とある場合も「いとどしく」とある場合もともに「一層しかじかである」の意とさだめて然るべきものと思うと結論づけている。しかしこのことも「いとどし」が述語性を内在し、修飾語の機能がうすい点から検討されるべきではないだろうか。

注1 「日本文法文語篇」四八ページ
注2 「言語過程における形容詞の取り扱いについて」国語学第六輯
注3 「編日本文法講座」二五ページ
注4 「国文学解釈と鑑賞」三六年一〇月号源氏物語注釈八一より
注5 「解釈」八巻四号六ページ

(広島県立大竹高等学校教諭)